平成23年(2011)

阿づまの光

3月号・Marto

五代教主作「呉須絵 梅文茶入」

題字 出口直日

通巻　第５０４号
発行　大本東京本部
東京本部長　松田行彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL（IP）050-5510-9502
03-3821-3701
FAX　03-3821-5283
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

青年の春によき種まかざれば
如何であるべき秋の実りは

出口王仁三郎聖師

後継者育成のチャンス

東京本部総務部長　木村　茂

高校生のころ、毎年春休みに両聖地で開催される「高校生講座」に参加することが、とても楽しみでした。

全国から集う顔・顔・顔。私が参加した当時は少年部が発足して間がないころで、青少年部行事が頻繁にはなく、他地区に顔見知りの同級生はいませんでした。また人と気軽に接することが得意ではなかった私には、ふたつ上の姉が青年部行事から帰るたびにとても楽しそうに話す姿がうらやましく、学校の友人とは違う神友と出会えることにとても魅力を感じました。

そして私も高校生になり、ほんの少しの勇気を持って一歩踏み出したことで、とても大切な神友を三年間の参加で得ることができました。

現在、青年部や青松会、また誠心会で活躍している人の多くが高校生講座の受講経験者であると聞きます。大本の教義に初めて触れる受講生も多いようです。信仰後継者を育てる良い機会だと思っています。

私が受講したころは二百名くらいの参加者でしたが、近年は少子化等にもよるのか五十名前後とのこと。少しさびしく感じます。今の倍の百人くらいでにぎやかに出来ないかなと思います。

昨年十一月、天恩郷で開催された「直心会長・青松会長・青年部長合同研修会」では、本年の後継者育成行事の柱として「高校生講座」の盛会を第一目標として、直心会・青松会・青年部が和合して、参加者送り出しに取り組むことになりました。

以前と違い、高校生に限らず忙しい日々を過ごす現代ですが、春休みの五日間聖地でたくさんの神友と過ごすのはいかがでしょう。「高校生講座」は人生で三回だけのチャンスです。

高校生のみなさん、「一生の宝物」を見つけに聖地に集いましょう。そして保護者のみなさま、信徒のみなさん、送り出しをよろしくお願いします。

第95回「21世紀、生きがい講座」より

明るく素直に前向きに⑫

現代の大本

講師 森（もり） 良（よし） 秀（ひで）
（東京本部次長）

お互いさまの心

今年に限らず、昭和から平成の時代に入ってより、ますます人々の考え方が自分さえ良ければいいという風潮が強くなったように思います。私の少年時代には、大人同士の会話の中でよく「お互いさまで」という言葉を耳にしていましたが、今ではほとんど聞くことがなくなりました。

この「お互いさま」は、自分さえ良ければよいという我よしの思想の対極にある言葉ではないかと思います。

「お互いさま」には三つの大事な心が内包されています。それは「待つ心」。言葉を代えて言えば忍耐です。次に「思いやる心」。人だけでなく禽獣虫魚などあらゆる生き物を思いやる心ですね。そして三つ目は「自分を大切にする心」です。

このお互いさまの心はどうすれば湧いてくるでしょうか。その要素は一つではありませんが、意外に大事なことは、挨拶をする、ドアの開け閉めを丁寧にする、履物をそろえるなど、一見心と全く違うことのようですが、実はそんな小さな積み重ねが「お互いさま」の心を育んでいると説く専門家もいます。

子育てを例にあげると、子どもというのは、親の言うことをなかなか聞かないものですが、親の行動や癖などはよく真似をしますね。

ですからお父さん、お母さんが〝おはよう〟〝お帰りなさい〟〝ありがとう〟と挨拶や会話を交わす家庭の子どもは、近所や学校でも挨拶ができます。家庭の中で繰り返し積み重ねていくことで、本当に豊かな心が育まれるのです。

まさに今日の世界各地で起こる紛争の根底にあるものは、全て我よしや敵愾心からきているのです。今こそ私たちは「お互いさま」の心を取り戻さねばならない時節を迎えています。

大本は何をするところか？

あえてこのことを初めに申し上げたのは、今日大本、人類愛善会が唱える、世界平和や人類の幸福を実現するにあたって、ここが一番大事であると繰り返し述べられているからです。

そもそも存在する全ての物には使命があり、それを大本では「用」「働き」と教えられています。人類だけでなく、植物も動物も、また無機質と言われる鉱物にも「用」「働き」があります。

では、大本の使命はいったい何でしょう？

出口直日三代教主は端的に次のように示しています。

『まことの神さまを拝ませていただき、神さまのお示しになっているお道を踏み行いつつ、各自がミタマの洗濯、大掃除をさせていただき、精神界を立替え立て直すご用に仕えさせていただくところでございます』

つまり、この世を創られたまことの神さまを拝ませていただき、自分自身の魂をきれいにするとともに、神さまが示された教えを実践して、世界の立替え立て直し、みろくの世建設のご用にお仕えさせていただくところなのです。

では神さまはどうやってみろくの世、地上天国を創くられるのでしょうか？　大本は大変小さな教団です。いくら立派な教えがあっても、世界の隅々にまでどのようにして伝えていくのだろうか？　という思いを、私は学生のころよく抱いていました。そして、その疑問が解けたのが、「型の大本」だったのです。大本の中にあったことは、世界に写るという教えです。大本は、みろくの世の型となり、鏡となり、先駆けとなる使命を持って生まれたのです。

「型」は、私たち日常的に何気なく使っている言葉でもあります。例えば、赤ちゃんが〝ママ〟とか〝マンマ〟と言葉を発しだすと、親は「うちの子が片言しゃべりだした！」とか言いますね？　この片言は、言葉の型を始めたという意味なのです。

これは言葉だけでなく、例えば本格的にスーツやブラウスなどを新調する時には型紙を作ります。型紙なしでいきなり布生地を裁断して縫製することはないわけで、型紙通りに断裁するから思い通りの衣装が出来るのです。ですからこの地上天国の型を、人類の幸せの型をまず大本の中から作り、そして人民の助かる道をこしらえていくと教えられています。

無形の障壁を取り除く

出口王仁三郎聖師（以下＝聖師）は、明治三十一年、二十七歳の時に故郷亀岡の霊山・高熊山の岩窟で修行を行います。その内容は一週間正座をし、飲食を絶つ荒行でした。その間、聖師の精霊は肉体を離れ、三千世界（現界・神界・幽界）を巡り、宗教者としての使命に目覚めます。そして大正十年、その経験を『霊界物語』（全八十一巻）として発表。大本の教典の一つとなりました。

その『霊界物語』の中には、みろくの世を建設するためのロードマップが記され、その絶対条件として、有形・無形の障壁を取り除くことであると教えています。

有形・無形の障壁について、聖師は以下のように示しています。

『世界平和を実現するためには、有形無形の障壁を取り除かねばならない。有形の障壁の最大のものは「対外的戦備（警察的武装は別）と国家的領土の閉鎖」で、無形の障壁の最大なるものは「国民および人種間の敵愾心」また「宗教団と宗教団との敵愾心」である。

この世界的の有形の大障壁を除くためには、先ず無形の障壁から取り除いてかからね

東京本部での大本歌祭（2008.4.13）

ばならない』

有形無形の障壁の中で、今実際に大本、また人類愛善会が取り組んでいるのは、無形の障壁、いわゆる宗教団体間の敵愾心を取り除く地道な活動です。

人類の歴史を振り返ると、宗教が原因で戦争していることが多いのです。国内では仏教伝来に伴う「蘇我物部の戦い」や「比叡山の僧兵」、一方、世界では十字軍があり、最近では中東地域の紛争がこれに当たります。

実は、そういった大きな戦があるたびに、宗教はそれを抑制するのではなく、むしろ賛同してきたのです。しかし、第二次世界大戦後は、さすがに世界の宗教教団は反省したのです。昭和三十七年には、カソリックの総本山であるイタリア・のバチカンで第二バチカン公会議が開かれ、非カソリック、非キリスト教とも和合していかなければならないという動きが出てきました。

日本の宗教界も太平洋戦争時は、ほとんどが戦争を賛美しました。しかし大本は、教団として戦争には一切協力はしていません。その時期大本は、当局から第二次大本事件の弾圧を受け、聖師以下教団幹部は未決に入れられ、解散状態でした。

第二次大本事件を担当した弁護士が、事件後、聖師に大本事件の最大の要因は何だったのかと尋ねたところ、聖師は、

『大本は戦争協力をしないために事件にあったのだ、今後世界に平和を訴えて行く上で宗教教団としての資格を神さまから与えられたのだ』

と答えたそうです。ですから大本は胸を張って、戦争協力をしていないと言えますし、戦争の悲惨さや世界平和の尊さを訴えるに充分な資格があると言えるのです。

エルサレムでの歌祭

そして現在、大本、人類愛善会では、具体的な平和活動の一つとして、全国各地で「大本歌祭」を執り行っています。

この歌祭はそもそも日本の古くから伝わる祭で、奈良時代から平安時代にかけて、村々で広く行われていた平和の祭典です。

それぞれの思いを三十一文字の和歌に託して、神さまへお供えするものだったのですが、江戸時代のころには途絶えていました。それを昭和十年に聖師が復興し、以来今日に至り、平成二十年にはこの大本東京本部の完成慶祝としても執り行われました。

その際には、イスラエル、エジプト、ヨルダンの駐日大使と、パレスチナ代表部の方々も平和の願いを込めた歌をお供えされました。ご存知のように、イスラエルとパレスチナは何年もの間、争いが続いていますが、参列された代表者は歌祭後には互いに抱き合っておられました。国としては敵対していても、個々には平和を構築していかなければならないという強い考えに立っておられるのです。

『わが願いエスペラントの歌まつり人類同胞こぞりてエルサレムの野に』

右は出口紅大本五代教主の歌です。これが教団の近未来の大きな目標です。

エルサレムは、一神教であるユダヤ、イスラム、キリスト、この三教の聖地であり、今も紛争が続いている場所です。このエルサレムで世界平和の歌祭を、それも世界共通語エスペラントで行いたいと願っての歌です。

実は去る十月、エスペラント歌祭がブラジルで行われました。ブラジルには、古くから大本の神の家があり、昨年は宗教団体として同国から正式認可を受けてから五十年の節目の年でした。

その大本南米本部があるサンパウロ州ジャンジーラ市と、エスペラントを用いて宣教を展開している首都ブラジリアでエスペラントによる歌祭を催したのです。ブラジリアの歌祭には、八カ国の駐伯大使をはじめ諸宗教の代表者が参加され、その内容、意義の素晴らしさに深い感銘を受けておられました。

「万聖の集会」への橋頭堡

さて、エルサレムでの歌祭の意義をもうしあげるならば、まず三大一神教の聖地で執り行うということでしょう。そこの場所に世界の宗教者を一同に集めて、大本の説く世界平和観を紹介し、更に歌祭の形式で祈り、お互いに対話をして世界の普遍の教えをまとめ、そのことにより無形の障壁を取り除くことが実現するのではないかと期待します。

それからエスペラントによる歌祭の意義です。世界共通語エスペラントは、大本では大正十二年に採用しました。これはポーランドのザメンホフ博士が作った人工語で、それぞれの母国語を大事にすると共に、複数の国々が出席する会議や、海外旅行時に用いると大変便利です。

ザメンホフ博士は、人道主義を大事にされ、言葉だけでなく、大本が唱える人類愛精神と同じことを説いていることも、大本が採用した大きな理由です。

さらに大本がエスペラントを採用したもう一つの大切な理由として、大本の教えを世界中の人々に正しく伝える手段・方法として考えたからです。実際大本の教典が、エスペラントで翻訳され、さらに世界のエスペランチストがそれぞれの母国の言葉に訳しています。これほど合理的なことはありません。世界の人たちが王仁三郎の精神を汲み取り実践していただくと、ますます世界平和に向けての拍車がかかると思います。

最後にエルサレム歌祭が「万聖の集会」への橋頭堡になると思われます。

このことは、『霊界物語』と並ぶ大本の教典『大本神諭』には

『神柱会議開きは神が開かな開けんぞよ』

と示されてあります。

世界の聖者、宗教者、精神的リーダーが一同に会して、対話を進め、世界の人類を善道に導いていく会合と位置付けられている「万聖の集会」の実現こそ、大本神業の大命題でもあります。

「神柱会議開き」である万聖の集会が開かれて、ようやく世の中が大本の神さまの意志どおりに動いていく時代が訪れるその時まで、大本、人類愛善会の活動は不変です。

節分大祭遥拝祭

節分大祭遥拝祭は二月三日、午後六時三十分より斎主・森良秀東京本部次長のもと執り行われ、百二十人が参拝した。

祭典では、参拝者が神言を奏上するなか、大祓行事が行われ、祭員が苑内と不忍池周辺の修祓を実施。

祭典後、大本神諭の拝読、斎主・祭員による豆まきが行われ、次いで松田行彦東京本部長があいさつをのべた。

鬼は内！　福は内！！

その後、参拝者はダルマや干支である兎の飾り物が当たる福引を楽しんだほか、食堂にて温かい甘酒をいただいた。

なお、東京本部では節分大祭で奉迎されたご神水による清祓行事を二月十七日と二十一日の両日に、多摩川（西多摩郡白丸ダム）、荒川（二瀬ダム・埼玉県秩父市）、利根川（群馬県渋川市坂東橋）で執行した。

東光苑月次祭

二月の東光苑月次祭、豊年祈願祭、市杵島姫命例大祭は二月十三日、午前十時三十分から、斎主・和田桂一祭務部長のもと執行され、三百六十人が参拝した。

松田本部長が少年少女祭員を紹介

祭員は福島・群馬・栃木・山梨・東京・神奈川主会、少年少女祭員は東京主会の涌井大嗣郎くん、土方清美さん、神奈川主会の田中あやのさん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐々木武雄埼玉主会長、添釜は村井社中の皆さんが担当した。

祭典後、松田行彦本部長があいさつに立ち、聖師さまの『吉岡発言』を引用して大本信徒の使命と覚悟を力説した。

また直会後、午後二時より二階講座室において「主会長連絡協議会」が開催された。

第97回「21世紀、生きがい講座」

第九十七回『二十一世紀、生きがい講座』は二月十六日午後七時から九時まで、東京本部講座室において、田中武男(独)海洋研究開発機構総務部長を講師に「深海から見た地球、そして生命」と題して開催された。参加者は十九人（うち、一般一人）。

講座では、海洋研究開発機構の組織や目的を紹介されたほか、保有する世界最大の深海掘削船〝ちきゅう〟とその活動や成果などについて、パワーポイントやビデオを用いて解説。「海は生物の〝揺りかご〟であり人類共通の財産である」と説かれた。

日本の周辺海域は生き物の宝庫

参加者からは、「我が国には資源が乏しいと言われてきましたが、豊富な海底資源を保有している可能性があるとのお話に、大いなる期待とともに、周辺国との関係において毅然とした態度が必要であると感じました（四十三歳・男性・一般）」「祓戸四柱の大神さまの働きと、日本の海洋及び深海プレートの働きに共通点があるという話がとても印象に残りました。（四十六歳・女性・信徒）」などの声が寄せられた。

第29回企業繁栄祈願祭

第２９回企業繁栄祈願祭を本年も下記の要項で執り行います。近年は企業経営者だけでなく、勤務先の会社や事業所など、生業全般の弥栄・繁栄を祈念し申し込まれる方が増えています。長引く平成不況を乗り越えるためにも、ぜひ企業繁栄祈願をおすすめいたします

日　程　４月２４日（日）午後２時３０分
会　場　大本東京本部
申し込み　申込用紙を送付しますので、ご希望の方は下記までご連絡ください（なお昨年お申し込みいただいた方には郵送いたします）
申込先　〒110-0008 台東区池之端 2-1-44 大本東京本部　総務部
※ 玉串は後日郵送か当日持参かを必ず明記してください
御玉串　一企業一万円以上（申込書に添えて玉串袋にてお納めください）
締　切　４月１８日（月）
※ なお、ご祈願は祈願祭以降一週間（４月３０日まで）行います

東光苑祭典・行事紹介

3月

東光苑月次祭（教主さまご臨席）
春季合同慰霊祭
13日（日）午前10時半

第98回「21世紀、生きがい講座」
講題　偉大なる大地とその神秘
講師　島本光久（愛善みずほ会理事）
16日（水）午後7時～9時

東光苑春季祭式講習会
26日（土）～27日（日）

二代教主毎年祭（59年）
31日（木）午前10時半

4月（クリーン月間）

観桜茶会
3日（日）午前10時半

東光苑春季大祭
10日（日）午前10時半

第99回「21世紀、生きがい講座」
講題　東アジアの神業根源地・モンゴル
講師　吾郷孝志（人類愛善会モンゴルセンター駐在担当）
20日（水）午後7時～9時

第29回企業繁栄祈願祭
24日（日）午後2時半

四代教主十年祭
29日（金）午前10時半